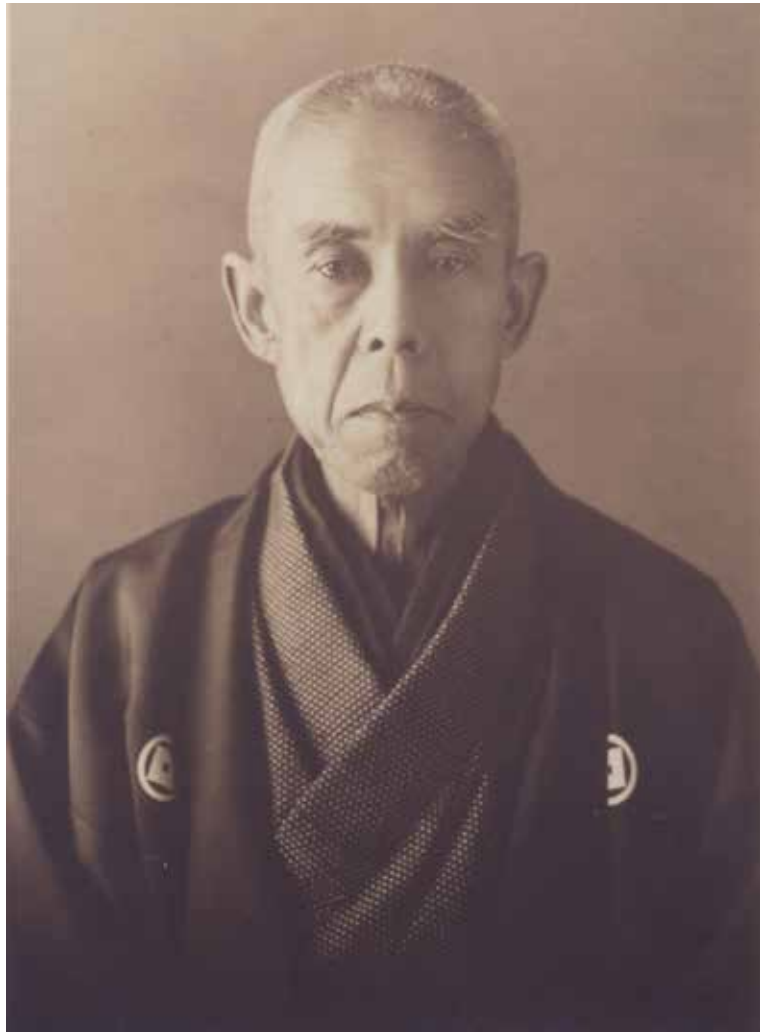


野口博士の恩師 小林 栄

野口英世博士の恩師として知られる小林栄。千里小学校退職後には「猪苗代日新館」を創立、教育者として数々の人材を世に輩出しました。地域振興にも取り組み、農村生活改善に尽力しました。今月号では、教育と地域振興に生涯をささげた小林栄について紹介します。



1_ 英世と一緒に記念撮影した貴重な写真 2_ 猪苗代日新館の授業風景。精神を統一するため、生徒たちと黙とうを行う 3_ 生徒が毎日朗読した猪苗代日新館生徒心得 4_ 明治44年度千里小学校の卒業記念写真(前列中央が栄) 5_ 15年ぶりに帰国した英世(左から3人目)とともに、当時の大隈重信首相のもとを訪れた栄(右) 6_ 猪苗代日新館に贈った英世直筆の書
写真提供＝(公財)野口英世記念会

校に在学した4年間担任を務め、明治25(1892)年には会津若松の会陽医院院長、渡部鼎を紹介。左手の手術を受けさせます。英世は栄を恩師と仰ぎ、東京やアメリカに渡ってから数々の手紙を送りました。

猪苗代日新館を創立

栄は徴兵検査の学力試験に携わった時に、尋常小学校卒業程

激動の幼少時代

小林栄は万延元(1860)年7月23日、会津藩士の父、兵右衛門英名、母、津久子の三男として生まれました。

当時、猪苗代の藩士の子弟は、会津藩校日新館猪苗代校に入学することが通例となっていました。明治元年の戊辰戦争の敗戦により会津藩は廃藩。猪苗代校も閉校となっていました。このような戦後の混乱の中にあつて、猪苗代の旧藩士たちは、将来を担う子どもたちのため、教育の場を設けることに尽力します。

明治3(1870)年、土津神社前に「見祢山幼学所」が開かれ、栄も読書や書道、四書などを学びました。私塾「静修塾」を開き、数百人余りの門下生を集めた浦上宗保や江戸幕府の昌平坂学問所に学び、後に猪苗代校の教授となり多くの人材を育てた上島良蔵らに栄は師事。勉学に励みました。

明治9(1876)年、師の上島は幼学所の秀才であつた栄を師範学校へ進むことを勧め、若松の第二師範学校に入学します。その後、師範学校は福島に統合され、栄もそこで学びました。

故郷・猪苗代で教員に

明治11(1878)年、18歳になった栄は師範学校を主席で卒業します。校長からは、県庁所在地となった福島町(現在の福島市)の学校に赴任するように勧められましたが、郷土の復興に携わりたいという信念から、猪苗代小学校の教壇に立つことになりました。教員として猪苗代小学校に15年間勤務した後、千里小学校に校長として赴任します。

栄は教育に対して、学問を修めることはもとより、人間教育に重きを置いていました。「教育においては、学校教育よりも家庭教育が重んぜられ、家庭教育よりは胎内教育が大切であることを忘れてはならぬ」と語っています。

医聖・野口英世を見出す

明治22(1889)年、栄は試験官として三ツ和小学校を訪れた際に、ぼろきれのような衣服を身に付け、左手にやけどの傷を負った野口清作、後の英世と出会います。栄は、英世を支援することとし、高等小学校への進学を勧めました。

栄は、英世が猪苗代高等小学

度の試験内容であつたにもかかわらず、ほとんどが解答されていなかったことに大きな衝撃を受けました。この時に、高等教育機関の必要性を感じ、自ら学校を創立することを決意します。

大正2(1913)年、栄は53歳の時に35年間務めた教員を辞任。大正4年、英世が15年ぶりに帰国すると、2人は青年教育の重要性を確認。栄の意志が固まります。翌年、栄は会津藩校日新館にちなみ、「私立猪苗代日新館」を創立し、自ら館長となりました。

猪苗代日新館は、教育目標を第1人間、第2健康、第3学問としていました。全日で通うことができる生徒の就学期間は1年でしたが、農繁期に通うことができない生徒の便宜を図るため、冬季だけのコースを設け、2～3年かけて卒業させました。

地域振興にも尽力

英世を生涯にわたって支え、教育者として知られる栄は、地域振興にも尽力しました。特に、農村生活の改善を図るため、農家の経営改善に力を注ぎました。栄は「地方村是の歌(猪苗代地方)」をつくり、農家経営について、分かりやすい言葉で

歌にし、村民らに農村経営の基礎を示しました。また、農業技師などを招いて品種改良に取り組んだほか、植林事業などを展開し、農家の家計の改善を図りました。

また、磐梯山噴火に関する研究を行ったほか、磐梯山周辺の国立公園化にも関心を示しています。大正12年に英世に宛てた手紙には「磐梯山はその候補地となれり。夏の公園として最も有力なるべし、その成否は近き数年にて定まるべし」と記されています。

さらには、文化財にも関心を寄せています。葦名家家臣の忠誠を伝える三忠碑。その付近には旧二本松街道の松並木がありました。ある時、数百もの松が伐採されたことから、これらがなくなることを危惧し、周辺の松並木を購入し、保存。松並木は、現在も残されています。

また、英世が黄熱病で亡くなったからは、野口英世記念館の創設に尽力。昭和15(1940)年、80歳で永眠しました。

戊辰戦争後の激動の時代に幼少期を過ごし、教育者として、地域振興の先駆者として活躍した小林栄。東日本大震災から約6年を迎え、復興を目指す私たちが、数々の功績から学ぶことも多いのではないだろうか。

小林栄先生を語る

野口英世博士ら多くの人材を世に輩出した小林栄先生。
小林先生が残した数々の功績。
小林栄顕彰会設立準備会の3人と土屋重憲教育長に、
小林先生について座談会形式で語っていただきました。

座長 小檜山六郎さん



野口英世博士筆小林栄像



顕彰会設立準備会発起人
小林光子さん

六 野口博士を育てた人物として栄先生は有名ですが、英語などを教わった松本先生に出会ったことも、博士にとつて幸運なことと言えます。

土 男兄弟が亡くなったという事情もあつてか、栄先生は福島師範学校を主席で卒業した後、猪苗代に帰ってきました。猪苗代小学校では訓導(教頭)として勤務し、その後、千里小学校で校長になります。最初から教頭ですから、いかに優秀であつたかということがうかがえます。

当時、教員は県ではなく、各市町村が採用し、給料を支払っていました。野口博士もお世話になった三ツ和小学校校長の松本順次郎先生など、猪苗代には優秀な教員が多数いました。
鬼 松本順次郎先生は長崎県の出身で、英語を得意としていました。野口博士が11歳の時に、生長として有給の臨時教員に抜てきしたのが松本先生です。野口博士を立派に育てたのは当然、母のシ力ですが、松本先生が最初の恩師とも言えます。そして栄先生と出会いますが、栄先生は生涯を通して野口博士を支援しています。

さて、栄先生は千里小学校退職後に猪苗代日新館を創立しました。猪苗代日新館は昭和15年まで25年間にわたって開かれました。
土 猪苗代には会津藩校日新館の分校がありましたが、戊辰戦争後に閉校となりました。その後、見祢山幼学所が開かれ、栄先生が学んでいます。敗戦直後、猪苗代の人たちが教育に力を入れていたからこそ、蒔いた種が芽を出すことになります。
栄先生が開いた猪苗代日新館には猪苗代の人のみならず、磐梯や湊、湖南からも生徒が学びに来ていたようです。
小 大正4年、野口博士は15年ぶりに帰国した時に、猪苗代日新館に直筆の校名を残しています。4年後、博士は論文で得た懸賞金を生徒たちの学資金にあてて支援していました。
六 栄先生は国立公園にも関心を持っていましたね。



顕彰会設立準備会事務局長
小檜山六郎さん

小檜山六郎さん(以下 六)
小林栄先生との出会いは、今から約20年ほど前になります。当時勤務していた野口英世記念館で小林栄展を開くことになり、資料の整理を私が担当することになりました。その時に栄先生の偉大さを実感しました。いつか、先生の功績を多くの人に知っていただきたいと思っていたところ、昨年、顕彰会設立に関する話があり、顕彰に携わることとなりました。

皆さんの栄先生に対する印象などを教えてください。

小林光子さん(以下 小)

私の父、光助が29歳の時に栄先生が亡くなっています。父は近所に住んでいたこともあり、親しみを込めて「おんつあま」と呼んでいたそうです。小林栄家とは親戚関係にありますが、父からもつと先生のことについて聞いておけばよかったと思います。

鬼多見賢さん(以下 鬼)

鬼 栄先生が磐梯山の登山道を開いたということは大変貴重なことです。それを教え子である小林才二さんが受け継ぎ、登山道の整備などを行いました。これは栄先生の影響を大いに受けていたと思います。当時、栄先生が現在の弘法清水を黄金清水と名付けた、という逸話も残っています。

小 このような町の出来事について、栄先生は逐一、野口博士に手紙で報告していました。国立公園化についても、博士のやりとりがあつたようです。

六 明治21年に起きた磐梯山噴火についてもさまざまな著書を残しています。

土 噴火直後は、周辺一帯が不毛の大地となりました。遠藤現夢らが私財をなげうって植林を行ったことは有名ですが、栄先生が磐梯山噴火の研究や裏磐梯復興に尽力していたことはあまり知られていません。

六 栄先生は教育者であるとともに、「地方村是の歌」に象徴されるように、地域振興に貢献した人物だと思います。今、私たちは少子高齢化などの課題を抱えており、地域振興の重要性が叫ばれています。このような点に着目して、栄先生の功績を掘り下げ、活動に取り組んでいきたいと思っています。



町教育委員会
土屋重憲 教育長

祖父が栄先生の孫の小林七之助さんといことで、栄先生の話しをよくしていました。栄先生は「顔の長い先生」とも呼ばれていたそうです。

六 栄先生が過ごした幼少期はどのような時代背景だったのでしょうか。

土屋重憲教育長(以下 土)

栄先生が生まれた1860年は、桜田門外の変が起きた年です。幼少の頃に戊辰戦争が始まり、会津藩は敗れます。まさに激動の大転換期であり、東日本大震災後の現在と似ているところがあるかもしれません。敗戦後、会津では教育振興が第一に進められました。先生は口癖のように「負けんなよ、負けてはならぬ」と話していたそうです。戊辰戦争の敗戦は、栄先生にも大きな影響を与えたと思われます。

六 猪苗代の人たちにとつても戊辰戦争の敗戦により大きな影響があつたものと思われます。

鬼 栄先生は、世界に羽ばたく野口博士を見出しました。また、猪苗代日新館を創立し、第2、第3の野口英世を輩出しようとした功績は非常に大きいと思います。顕彰会発起人の一人として、多くの町民の人に顕彰会に参加してほしいです。

小 栄先生は、生涯にわたって人材育成に力を注ぎました。野口博士をはじめ、多くの優秀な人材を育てた栄先生のことを多くのの人に知ってほしいです。

土 教育者としての一面のほか、地域社会への貢献度の高さなど、非常にスケールの大きい人だったと感じます。このたび、顕彰会が立ち上がるということですが、まだ知られていないことも多いので、さらなる研究を重ねていただきたいです。

小林栄顕彰会については、設立準備会事務局、小檜山さんへお問い合わせください。

☎090(7930)0901



顕彰会設立準備会発起人
鬼多見賢さん